

# 知って役立つ発達心理学

渡辺弥生

Yayoi Watanabe  
(法政大学教授)

## 第6回 攻撃行動のメカニズム ——いじめ予防のために

**い**じめがなぜ起きるのか、そのメカニズムを知るからこそ、予防策を講じることができます。今回は、そのメカニズムを考えるモデルの一つ、「社会的情報処理理論」の枠組みを紹介しましょう。

例えば、道を歩いている、あなたの肩が誰かの肩に当たったとしましょう。さて、あなたは、どんな反応をするでしょう？ 日常の中でよく見かけるシーンとしては、「あ、ごめんなさい」と謝る行動を取る人もいれば、「なんだよ」と怒った口調で返したり、押し返したりするなど、攻撃的な行動を取る人もいます。

### なぜ、取る行動が人によって違うのか

同じ出来事に遭遇しても、人によって謝罪したり、攻撃したりと、行動の違いが顕著になるのは、なぜでしょう。社会的情報処理理論では、こうした「ある出来事に直面して、ある行動を選択し、実行する」というプロセスを、人間の思考の情報処理として見立てます。このプロセスは、対人関係における情報処理であることから、社会的情報処理モデルとよばれています。

まず、下図のように、「肩が当たった」という出来事を、「情報の符号化」(①)によって、連続して起きている事象から切り出して捉えます。

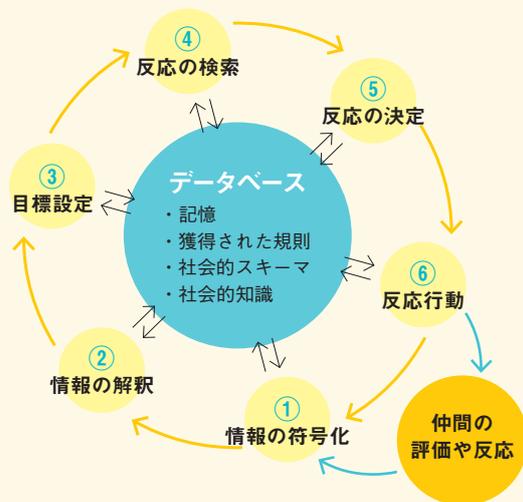


図 「Crick & Dodge (1994) の社会的情報処理モデル」を参考に作成

その次に、私たちは瞬時に、「情報の解釈」(②)や原因探しを始めます。ここで「あ、ごめんなさい」と謝る人は、「自分がぼうっとしてたからだ」などと、自分に原因を求めるような解釈をしています。「なんだよ！」と怒る人は、「相手がわざとやってきた」と解釈しています。

そのうえで、「目標設定」(③)を行い、相手が知らない人なのか、上司や友達なのかなどの関係性を考えて、この先どのような行動を取るかを考えます。これからも長期的に大事にするべき関係性だと捉えれば、相手を傷つけない行動を取ろうと思うかもしれません。しかし、二度と会わない関係性なら、怒りをぶつけてもよいと判断するかもしれないのです。

「反応の検索」(④)では、「謝る」「悪態をつく」「蹴る」など、自分の行動のレパートリーの中から反応を探します。そして、その中でベストだと判断したことが「反応の決定」(⑤)となり、最終的に行動に移されるというわけです。

### いじめを予防するために

このモデルをもとに考えることで、「解釈を他人のせいにしがち」「目標設定がなく行き当たりばったり」「行動のレパートリーに適切な行動が入っていない」「ベストな選択ができない」など、①～⑥の情報処理のどこに問題があるかを検討することができます。攻撃行動を取りがちな子どもの問題がこのプロセスのどこにあるかを明らかにし、問題の解決に必要なスキルを獲得できるよう支援するとよいでしょう。

あるいは、こうした情報処理自体が未熟だということがわかれば、人間が考えて行動を導き出すときのプロセスを教えて、考え方が感情や行動にも影響することに気づかせるとよいでしょう。

渡辺弥生 ●わたなべ やよい

発達心理学、教育学博士。法政大学文学部教授。著書に『感情の正体——発達心理学で気持ちをマネジメントする』(筑摩書房)、『子どもの「10歳の壁」とは何か? 乗り越えるための発達心理学』(光文社)など。監修に『まんがでわかる発達心理学』(講談社)など。光村図書小・中学校『道徳』教科書編集委員。